

親子双方の注意欠如・多動症的行動特性と親子関係との関連

○齊藤 彩 (お茶の水女子大学)

菅原ますみ (お茶の水女子大学)

キーワード：注意欠如・多動症, ADHD, 親子関係

問題と目的

注意欠如・多動症 (ADHD) の子どもの家庭では、親子関係における問題に直面しやすいことが指摘されている (Johnston & Mash, 2001)。また、ADHD の診断を受けた子どもだけでなく、子どもの注意欠如・多動症的行動特性 (ADHD 特性) の高さについても、親子関係の問題のリスク要因であることが示されている (齊藤他, 2016)。一方、子どもだけでなく、親の ADHD 特性の高さについても、親子関係の問題の多さに関連を示すことが明らかとなっている (齊藤・坂田, 2017)。しかしながら、親子双方の ADHD 特性ならびにその組み合わせが親子関係にどのような関連を示すのかについては、これまでに十分な検討が行われていない。本研究は、親子双方の ADHD 特性の高さならびにその組み合わせが、親子関係 (養育のあたたかさ、親子間の葛藤) にどのような関連を示すのか、2 時点の縦断データを用いて検討することとした。

方 法

調査対象者と手続き：子どもの養育環境に関する縦断研究の登録家庭において、対象児が小学 6 年時 (Time 1) と中学 1 年時 (Time 2) の 2 時点のデータが欠損なく揃った母親 201 名と父親 158 名の回答を分析対象とした。2015 年 2 月と 2015 年 12 月に、郵送により質問紙の配付・回収を行った。

測定尺度：(1)親の注意欠如・多動傾向 (Time 1): Adult ADHD Self-Report Scale (ASRS) (Kessler, 2005) 18 項目, (2)子どもの注意欠如・多動傾向 (Time 1): ADHD Rating Scale (DuPaul et al., 1998; 市川・田中 監修, 2008) 18 項目, (3)養育のあたたかさ (Time 2): Parental Bonding Instrument (Parker, 1979) を基に開発された母親・父親版養育態度尺度 (菅原他, 2000) のうちあたたかさ 5 項目, (4)親子間の葛藤: Network Relationship Inventory (Furman & Buhrmester, 1992; 吉武他, 2014) の母親・父親版のうち葛藤 3 項目

結果と考察

親子の各 ADHD 特性を Step 1, 親子の ADHD 特性の交互作用を Step 2 で投入し、親子関係の各変数を従属変数とする階層的重回帰分析を行った。母親の養育のあたたかさに対しては、子どもの ADHD 特性のみが有意な負の関連を示した ($\beta = -.25, p < .01$)。一方、母子間の葛藤に対しては、母子の ADHD 特性の有意な交互作用が見られ ($\beta = -.18, p < .05$)、母親の ADHD 特性が高い場合 ($\beta = .18, p < .05$) に比べて低い場合 ($\beta = .44, p < .01$) の方が、子どもの ADHD 特性の高さから母子間の葛藤の多さへの正の関連がより強いことが明らかとなった (Figure 1)。父親の養育のあたたかさに対しては、父子の各 ADHD 特性が有意な負の関連を示したが ($\beta = -.22, p < .01$; $\beta = -.27, p < .01$)、交互作用は見られなかった。一方、父子間の葛藤に対しては、いずれの変数も関連を示さなかった。

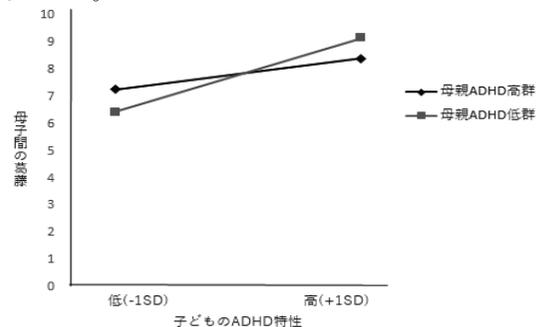


Figure 1 親子の ADHD と母子間の葛藤との関連

本研究により、あたたかな養育の不足や親子間の葛藤といった親子関係の問題を検討する際に、親子双方の ADHD 特性に着目することの重要性が示唆された。母子間の葛藤は、親の ADHD 特性が低い一方で子どもの ADHD 特性が高い家庭において、特に注意が必要であるといえるだろう。

主要引用文献

- Johnston & Mash (2001). *Clin Child Fam Psychol Rev*, 4, 183-207.
 齊藤他(2016). パーソナリティ研究, 25, 74-85.
 齊藤・坂田(2017). 人間文化創成科学論叢, 19, 165-173.